



# 夢使い

島田雅彦

レンタルチャイルドの新一都物語

講談社

夢使い

レンタルチャイルドの新二都物語

1989年11月7日 第1刷発行

著者 島田雅彦

発行者 加藤勝久

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二／郵便番号一二二  
電話東京(〇三)九四五―二―二(大代表)

印刷所 株式会社精興社

製本所 株式会社黒岩大光堂

定価 一八五〇円(本体一七九六円)



落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。  
送料小社負担にてお取替えいたします。なお、この本につ  
いてのお問い合わせは文芸図書第一出版部あてにお願い  
いたします。

© Masahiko Shimada 1989, Printed in Japan

しまだ まさひこ  
島田雅彦

1961年東京に生まれる。

東京外国語大学ロシア語科卒。1983年

「優しいサヨクのための嬉遊曲」を発表し、  
大きな注目を集める。『夢遊王国のための  
音楽』で第6回野間文芸新人賞を受賞。

著書に、『優しいサヨクのための嬉遊曲』

『天国が降ってくる』(共に福武書店刊)、

『ドンナ・アンナ』(新潮社刊)、『未人賞を

行物体』(文藝春秋刊)、『偽作のためのアル

ライフ』(講談社刊)等があた。

夢使い・目次

第一卷

1 舞子の嗅覚 9

意外な組み合わせ

2 隕石と乳母車 33

Go to hell!

3 しょうがないという理論 46

お金より不器用だが愛しい男／ミカイナイトの話をして！／びん代抜き／世の中そんなに甘くない／おまえの目は卑しい

4 毎日が乱交パーティー 84

ミカイナイトの脳波／記憶喪失の都市／エリザベートとヴェヌス／絵の具の染み／愛の厳しさ／ため息／ぼくは世を捨てたのだ／一週間の仕事

第二卷

5 浦島太郎 121

困った顔してビッツァを食う犬

6 嵐の孤児たち <sup>138</sup>

あたしは五百ドル／土人の酋長とみなし子／We have no secrets between us／息  
抜き／千二十四重人格／妖精は忙しい／恋人が欲しい／宇宙人の子供

7 ペネロピー <sup>195</sup>

もっと自由になりてえなあ／村間と妖精／死ぬこと十回／夢を訪ねて／ミカイナイ  
トとビノビノ／契約

第三巻

8 原始人、東京上陸 <sup>245</sup>

不眠症の猿／やっちまえ、犯しちまえ／無人島の歴史と伝統／欲求不満の祭／回転  
するギザギザ

9 因果関係を探して <sup>281</sup>

みみずになって、泥を食え／闇の懷に入り、この世をのぞく／どちらの可能性もあ  
ります／So weird／  

10 ラファエル <sup>313</sup>

男装の麗人

11 平家物語 324

浦島太郎の歴史観

12 優しい異教徒 334

一人で悩んでも駄目だよ

第四卷

13 相手は幽霊か 357

どんな服を着て会ったらいいかしら／ぼくが世の中だ／あざらしビルへ

14 奇妙な仕事 371

カラヴァッジョの静物画／変則背泳ぎ／どんな仕事でしょう／せめてもの親孝行

15 砂漠のトロヴァドール 388

ハンサムなツバメ／オカアさん、目が潤んでますよ／君、口笛吹けないの？／あな  
たの恋人になります

16 天地創造 422

ハッピーエンド／天地創造

『夢使い』覚え書き

# 夢使い

レンタルチャイルドの  
新二都物語

書下ろし長篇小説



# 第一卷



## 1 舞子の嗅覚

### 意外な組み合わせ

『私の息子を探し出して欲しいのです』

要約すると、依頼状の内容はこうだ。あまりに唐突なので依頼主の勘違いでなければ、身勝手なはずらと思えなかった。冗談にしても全然可笑しく<sup>か</sup>ない。

依頼主の名はアミノ・ミカ、土地転がしの鬼故網野元信の未亡人だ。生前は「骨の髄までしゃぶる男」とまでののしられた故人だが、不思議にも未亡人は故人の宿敵の怨恨や呪いに満ちた世評の巻き添えを喰らうことはなかった。夫が悪者となれば、内助の功を尽くす妻は夫の共犯者になる。悪妻としての評判が立っても、似た者同士と片づけられる。しかし、彼女は徹底して、網野氏の部外者でい続けられたのだ。夫の悪事に加担することなく、悪事の代償として

の慈善に走るわけでもない。奇妙なお金の使い方をする酔狂なバトロンとでもいうべき女性が  
アミノ・ミカ夫人その人だった。

彼女は日系アメリカ人の二世で、少女時代をニューヨークで過したあと、二十八の時に来日し、その間いろいろあったが、今は土地成金の遺産を往年の成金アメリカ人と同じように使いまくる身となったのである。

アミノ夫人は自分を日本人ともアメリカ人とも見做みなさなかった。どちらであっても、居心地が悪い時代に生きてきたので、「あいだ」がふるさとのようなものだった。彼女はカリフォルニアとアリゾナの州境に近い町で生まれ、今は鎌倉もつきよに蟄居もつきよしている。しかし、自分が帰ってゆく場所はそのあいだの太平洋だと思っていた。いや、何かが彼女にそう思わせていたのだ。両親でも先祖でもなく、アメリカでもなく、日本でもなく、彼女の本能が。

六条舞子はそのアミノ夫人と三度ほど会っただけで、特に親しい間柄でもなかった。そこへ唐突に夫人の息子探しを依頼する手紙が舞い込み、その手紙を読み終えるのを壁の穴からのぞき見していたように電話が鳴った。とぼけた調子と独特のリズムを帯びた男の声が受話器を通して、彼女の耳にまともわりつく。あのフランス語なまりのべらんめえ調の話し方に彼女はリズムを狂わされ、相手のペースに巻き込まれてしまった。

男はアミノ夫人の秘書だという。アミノ夫人は、証券アナリストとしての舞子の活躍ぶり人を伝てに聞いており、是非とも舞子の人を見る眼識と情報処理能力、人当りのよさ、そして何

よりも勘の鋭さを拝借したい、といっている。ともかく、夫人に直接会って、話を聞くだけでも聞いて欲しい、都合のいい日時に迎えの車を差し向けるので、あなたはドライヴ気分ですれに乗ってくれさえすればいい、と随分、勝手なことをいうのだった。

出張帰りでまだ時差呆けのめやが晴れていなかったせいも、その秘書に操られるように手帳を調べ、日時を指定してしまった。

ちょうど一週間後の午後七時、舞子は鎌倉のアミノ夫人邸へ向っていたが、不安はなかった。運転手がつけているオーディオコロンの匂いに奇妙に食欲をそそられ、豪華なパーティに招待されたシンデレラの姉のような気分だった。

車内ではシェーンベルクの『浄められた夜』の弦の響きがぶつかり合い、からみ合っている。運転手に頼んで、FMを受信してもらった。ちょうど、今しがたリビドー・クワルテットとその仲間による演奏がトピカ・ホールで始まったところだ。コンサート会場の音が電波に乗って、自分の耳に届くまでにどのくらいの時間のずれがあるのだろうか？ などと考えていた。

舞子はアミノ夫人主催のパーティに招待された日のことを憶い出した。海を望むアミノ邸のテラス。波のざわめきを通奏低音にして、誰かがギターを弾いている。どんな人たちが集まっていたかしら……みんな同じ型からぬいたような笑顔をしていて、同じように陽焼けしていた。水着売場のマネキンが十数体、半ズボンや白い麻のスーツ、ムームーや背中が歩いているようなイヴニングドレスを着て、雑談しているのだった。私はハイレグの水着の上にピンクのマン

トをつけていた。

アミノ夫人に私を紹介した人は私の記憶の中で透明人間になりかけていたが、夫人の顔は憶えている。何て化粧が上手なのかしら、と感心したっけ。目尻のカラスの足跡や口の両脇の二重かっこまで、素敵なアクセサリーのようだった。私は「ミス湘南の六条舞子さん、二十歳になったばかりの才女」として紹介された。そのあと、私はテラスに即席でしつらえられた台の上に立たされ、会場に集まった人たちの意地の悪い質問に答えるというアトラクションを演じた。それがミス湘南としての私の最初の仕事だった。質問はどれもその人の知能指数を疑いたくなるようなものだった。例えば、あなたは処女か、あなたは男の体のどの部分が一番好きか、自分の体ではどの部分が好きか、将来何になりたいか、結婚相手の理想像を述べよ、しまいには、僕を愛してるか、などという出す男もいた。私はどの質問にも即座に答えた。私は修道女ではありません。女性にはない部分が好きです。自分には見えないところが好きです。土に帰って花を咲かせたいと思います。私は理想と結婚する気はありません。そして、最後の質問への答え。――決して憎んではいません。

もう五年前の話だ。あの頃、六条舞子は首猛彦くびたけひこの愛読者だった。神経回路の配線を間違えたような登場人物しか出てこない首猛彦の青春小説は少数の月に憑つかれた読者たちの熱狂的支持を受けていた。首猛彦の愛読者の多くは、人の意表をつく術や話のはぐらかし、質問者が自らの質問に赤面するよう仕向ける技を作品から学ぼうとしていたのだ。少なくとも、三千人に及

ぶ鼻持ちならない人間を育成した首猛彦の罪は二年間の強制入院に価する。彼はそう自己宣告して、自らすすんで精神病院の住人となったのだった。

ところで、ミス湘南六条舞子のアトラクションはパーティーの座を鼻白ませながらも、ホステスのアミノ夫人の興味をそそった。彼女は舞子に「就職の世話をしたい」と申し出た。舞子は夫人の好意を少しだけ利用して、大学在学中からインベリアル証券の調査部でアルバイトするかたわら、アナリストとしての訓練を受け、そのままプロフェッショナルになった。そういういきさつがあったにせよ、夫人は舞子のことをどれだけ知っているのだろうか？　もう二年以上の御無沙汰だ。そのあいだ、型通りの暑中見舞いと年賀状を書いただけで、声も聞いていない。それにしても、証券アナリストと人探しはどう結びつくのだろうか？　よもや、私を探偵や情報屋と同類と見做してはいないかしら、しかも自分の息子を探して欲しい、などと。一瞬、呆け老人になったアミノ夫人の姿を舞子は想像したが、どういうわけか夫人の首が弥勒菩薩の首にすげ換えられていた。確かに彼女はまだ呆けるには二十年早かった。

——アミノ夫人はおいくつですか？

運転手は車のスピードを少し落とし、数を勘定する素振りをしながら答えた。

——五十二歳になられたと思います。まだ、三十代のようですよ。肌のつやもよろしくて。きつと若いツバメの血を吸うのが一番の美容法なのだろう。ひょっとすると、夫人はレズビアンかも。自分の息子探しをさせるのは口実で、私をハーレムに誘い込もうとしているのかし

ら。なぜか夫人は、レズの花園の女王にびったりだ。すると、私は男装させられるんだ。運転手がつけているのと同じオーデコロンをつけて？ まさか。

——その香りは運転手さんに合ってますよ。

——恐れ入ります。何やら煙草のヤニとよく馴染む匂いだそうです。奥様は男性に香水をブレゼントする癖があるんですよ。

舞子が高校時代につき合っていたボーイフレンドは全く体臭のない男だった。どんなに汗をかいても彼の体からは洗いざらしのシャツの匂いしかしなかった。鼻で彼の存在を感じられないうのが彼女には物足りなくて、やがて、人形か幽霊とつき合っているような気になってきたのだった。あれ以来、彼女の嗅覚は男の体臭に敏感になっており、すれ違っただけでその男がセックスを終えたところだ、などとわかってしまう。小うるさい鼻を持ったおかげで、生理的な好き嫌いはかりが先行する。そのくせ、何にでも鼻をつっこみたくなる性分だから、二重に手を焼く。彼女が下品だとすれば、全て鼻のせいだ。鼻の先から彼女は犬になってゆく。

『浄められた夜』が終り、プログラムの二曲目、モーツァルトの『弦楽五重奏曲K四〇六』を第二楽章まで聴いたところでマダム・アミノの屋敷に到着した。車を降りると、早速、潮風が彼女の髪に磯の匂いと湿気を染み込ませた。

懐かしいわ。あの玄関に見覚えがある。跳ねる馬のレリーフが彫られた扉を開けると、吹き抜けのロビーになっていて、アンティークのトルコのカーペットが敷いてあるのよ。階段の踊